

# 作品の実物を見に行こう!



館内写真撮影OKです!

取材にご協力いただいた  
渡辺さく子さん

●入館料 一般300円(入館料+飲物セット500円) ヤオコーカードを持参すると100円引き! ●休館日 月曜日 ●開館時間 10時~17時  
●駐車場 15台 ●〒350-0851 川越市氷川町109-1 ●☎049-223-9511 ●https://www.yaoko-net.com/museum/

シンボルツリーは『爛熳』のシダレザクラ

## ヤオコー川越美術館 三栖右嗣記念館

川越市氷川町109-1

ヤオコーと三栖右嗣さんは、実質の創業者で前会長の川野トモさんが、コスモスの絵に心を動かされ絵を求めたことから、交流が始まりました。ヤオコーの創業120周年事業として建築されたこの美術館は、2012年(平成24年)に開館。建物は、建築士の伊東豊雄さんによって、作品の特徴でもある光を強く意識して設計されています。なお、展示作品の中にはガラスが入っていない作品も。これは、直接作品の素晴らしさを味わってほしいからに加え、「これほどの作品を傷つけようとする人はいない」といえるからとのこと。

現在開催中の企画展

### 三栖右嗣 画業65年の足跡をたずねて 9月13日(木)~令和5年3月12日(日)

三栖右嗣さんの歴史を振り返る企画展。本特集で掲載した作品が展示されています。



石版画集「林檎のある風景」20葉集より(リトグラフ,1981)



三栖右嗣さんの手がけた緞帳『薫風』が見られるのはここだけ!

ときがわ町で三栖右嗣さんの作品を見られる!

## 三栖右嗣リトグラフ展示室

ときがわ町文化センター(アスピアたまがわ)

三栖右嗣さんのリトグラフ(石版画) 作品を中心に展示しています。まるで墨絵のような版画作品にも、三栖右嗣さんの卓越した技術が光ります。油絵とはまた違う、モノクロの世界をご堪能ください。

●入館料 無料 ●休館日 月曜日・国民の祝日・年末年始(12月28日~1月4日) ●開館時間 9時~17時 ●駐車場 あり ●〒355-0395 比企郡ときがわ町大字玉川2510 ときがわ町文化センター内 ●☎65-4858 ●https://www.town.tokigawa.lg.jp/Info/702



↑千葉の漁師「吉宗」さんがモデルの『キツツオ爺さん』(油彩,1975,60号)



↑『秋日』(油彩,1999,120号)

三栖右嗣さんの言葉  
「花も、実も、海も、いのちあるものとして私をとらえる。原色の花々は、南国の灼熱の熱さの象徴であり、人生におきかえれば活力に満ちた季節を思わせる。二度と巡って来ないのちを燃やせ、燃えつくせ、という思いを塗り込めて私は描く。熟れたリンゴの、その真赤ないのちが陽光に輝き、つめたい初冬の野の姿を私は好む。熱れ切つていまを盛りのリンゴたちも、やがて、枯葉とともに土に還りまた新たな芽ばえとなるであろう。そして、人もまた老いて身は朽ちるともそのひたむきな生きざまはその息子の心の深底に根をおろすことを信じる。いずれも「生命」と言うテーマが私にとっては共通するものなのである。」  
●アートプランニング・協和出版、1979年、p.14

↓『爛熳』(油彩,1996,500号)



を超えた母だという。ずっと「画家としては」描きたかったが、「息子として」それはどうかと葛藤し、「描いている最中は涙が止まらなかった」といいます。そしてこの作品が、「絵画における芥川賞」とも呼ばれる「安井賞」を受賞。しかし、モデルとなった大切なお母さまは、その吉報が届く前にこの世を去ってしまったのです。  
その後、スペインの個展で大成功を収め、世界に通用することを証明し、名実ともに日本を代表する現代の画家となるのでした。

1980年代、三栖右嗣さんは「日本の四季シリーズ」に取り組んでいきます。以降の作品は、明るい部分がより明るく、さらには鮮やかさが際立つようになります。  
54歳で結婚した翌年の1982年、「理屈抜きの自然との対話」を求め、玉川村(現ときがわ町)へ転居します。当時は周囲に人家がなく、文字通り自然の中での制作。そして、各国を旅行して作品を残してきた画家が、最後に行きついたのは、日本のサクラでした。  
そして2010年、82歳でこの世を去りました。晩年は体調を崩し、大好きなお酒も焼酎で我慢していたという三栖右嗣さん。生涯を通じて「生命」を表現することを追求し



↑生涯を通じたテーマのひとつ、地面に落ちたリンゴを描いた作品。収穫されず地面に落ちるのが、自然の姿。真っ赤に輝くリンゴは、燃え盛る命の証。これから朽ちていく未来、そして新しい命につながっていく象徴。だから「地面に落ちたリンゴ」なのだ、と、町広報担当は考えます。【こもれ陽】(油彩,40号)

た偉丈夫の魂は、一面に花開くシダレザクラとともに、今も絵の中に生き続けています。

取材協力  
ヤオコー川越美術館 渡辺さく子さん  
三栖右嗣さん(三栖右嗣夫人)